九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『追善二腹帯八百屋の段』

横山，正
大阪教育大学名誉教授

https://doi.org/10.15017/12020

出版情報：語文研究. 57, pp.51-53, 1984-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

（資料紹介）

『追善二腹帯八百屋の段』について

横山　正

『追善二腹帯八百屋の段』（題簽）という浄瑠璃の興行は操浄瑠璃興行年表類には見当らない。

「二腹帯」は勿論、紀海音作の「心中二ッ腹帯」であり、追善とあるうえに、一作品全体でなく八百屋の段だけであるから、「心中二ッ腹帯」が豊竹座に初演された享保七年四月以後の上演であることには間違いない。

『義太夫年表・近世篇』によって「二ッ腹帯」の題名を持つ作品のなるべく早い頃の上演を拾ってみると次のものがある（歌舞伎や読み物類は除く）。

(1)享保七年四月　大坂豊竹座初演。
(2)同年六月　　江戸辰松座上演。
(3)明和元年十一月大坂豊竹座上演。

右のうち、(1)の場合は勿論海音原作のままの上演であり、(2)の場合も上方初演に続いての江戸に於ける初演であるため、これも大体原作通りの上演と考えてよいであろう。（たゞし享保七年六月刊の江戸伊賀屋版『心中二ッ腹帯』によって見ると、原作に多少手を加えている。）

(1)(2)と(3)との間には四十年以上の歳月が経過しているのであるが、この間における『心中二ッ腹帯』の上演は年表類にも見られず、現在のところでは同名での上演はされなかったと考えるほかないであろう。

この(3)の明和元年十一月十五日より大坂豊竹座での再演は『義太夫年表・近世篇』では、『演芸月刊』八によって掲載したものであるが

前狂言　嬢景清八島日記
大切　心中二ッ腹帯　八百屋段

の上演形式即ち前狂言の『嬢景清八島日記』の切狂言として『心中二ッ腹帯』の八百屋の段を上演している。この二作を並べて上演した意義については後に記したいと思うが、この「心中二ッ腹帯八百屋段」がここで紹介する『追善二腹帯八百屋の段』であると推定する。その理由を述べよう。

原作では女主人公の名はおちよであり、江戸辰松座の番付でも「女房おちよ　辰松幸介」とあるが、この『追善二腹帯八百屋の段』では、殆んどお長となっており、「嫁の長めが」「お長はそこを」

などとある。（ただし、原作のままのおちよとなっている所が一ケ所だけある。訂正洩れであろう。）そうして明和元年十一月の大坂豊竹座興行の「心中二ッ腹帯　八百屋段」について『演芸月刊』八輯所載の、石割松太郎「木谷蓬吟氏に問ふ」に挙げている人形役割の中で

半兵衛　　若竹伊三郎
女房おてう　藤井小三郎

と記し、『義太夫年表』では典拠未詳とするが、女房の名の「おてう」とあるのは浄瑠璃本『追善二腹帯八百屋の段』の女主人公名と一致する。

尤もこの登場人物名の変更は寛保元年五月二十一日より豊竹座興行の『青梅撰食盛』（『心中二ッ腹帯』の改作）で、半兵衛を半平に、おちよをお長に、仁右衛門を半右衛門に変えており、この系統を引くものであるが、『青梅撰食盛』は本書の題名と異なるので、ここでは問題にならない。しかも本書（追善二腹帯八百屋の段）では、半平を原作の半兵衛に戻し、おちよのお長をそのまま受けつぎ、半右衛門を原作の仁右衛門に戻している。これに対し、石割氏が『演芸月刊』に挙げるこの上演の人形役割の登場人物名の殆んどすべてが本書中の人物と一致する中で、「八百屋仁兵衛」「手代和介」の二名だけが本書と異なっている。これらは恐らく「仁右衛門」「利介」の間違いであろう。

更に『浪花見聞雑話』に、この興行について「明和元年に和歌太夫芝居にて、故人越前少掾追善に、筑前掾再芝居へ出て、心中二ッ腹帯といふ八百屋の場を語りし事、……」と見える（義太夫年表別記による）。これは本書の奥書の 高弟豊竹越前少掾 豊竹筑前少掾 の署名と一致する。

これらによって、この浄瑠璃本が明和元年に豊竹越前少掾の追善興行として豊竹座で上演されたものであったことは動かなくなり、認めざるをえないのである。ただ石割氏が人形役割をここで挙げている原番付と思われるものは現在不明である。

なお、題簽と奥付に見える大坂の書肆、正本屋小兵衛については『増訂書賈集覧』に宝暦―寛政とあり、時期的には問題ないが、その住所は「大坂油町二丁目（明和）」とあって、この浄瑠璃本奥付の住所「大坂長堀心斉橋北詰」とあるのと相違する。たゞ明和元年上演の本であるため、元年頃はまだ旧住所であったと考えてもよいであろう。奥付に連署の鱗形屋孫兵衛は「元和―天明　江戸」（増訂書賈集覧）であるから明和元年出版には不都合を生じない。

最後に、明和元年十月二十一日より豊竹座で『嬢景清八島日記』を上演している。その番付の口上によれば、豊竹越前少掾死去の追善興行であるが、『伝奇作書』拾遺下の巻「娘景清八島日記の話」によれば「此浄瑠璃は明和元甲申年十月廿一日より始る（中略）大切は追善紀念□とて豊竹越前少掾藤原繁泰行年八十四才にして此秋九月十三日に死し其追善の段ありていはゞ三段目迄の端狂言なり」とある。これに続いて同年十一月には、この『嬢景清八島日記』を前狂言にして、その大切には越前少掾（上野少掾時代）が初演した海音の世話物『心中二ッ腹帯』を今度は『追善二腹帯八百屋の段』として上演し、時代物・世話物の両者で越前少掾の追善を十月・十一月の二ケ月にわたって引続き行なったわけである。即ち『追善二腹帯八百屋の段』に付けられた「追善」の二字の意味は越前少掾の死に対するものであって、『心中二ッ腹帯』の主人公に対する追善興行ではなかったのである。

これで『心中二ッ腹帯』の心中事件より四十三年目に当る明和元年がおちよ・半兵衛の年忌に当らぬ理由も判明するのである。

以上によって『義太夫年表・近世篇〈延宝〜天明〉1』三五七頁上段の「十一月十五日」の豊竹座興行の項の外題名は

前狂言　嬢景清八島日記
大切　追善二腹帯八百屋の段

と改め、下段人形名のうち「八百屋仁兵衛」を「八百屋仁右衛門」に、「手代和介」を「手代利介」に改めなければならない。

次に本書の書誌を簡略に記しておく。

装幀　半紙本。縦二二・一センチ、横一五・七センチ。
表紙　原表紙。紺。無地。
題簽　原題簽。表紙の中央。縦一八・二センチ、横三・九センチ。
追善二腹帯八百屋の段　豊竹越前少掾　豊竹筑前少掾直伝　正本屋小兵衛板

「追善二腹帯八百屋の段」の表紙・原題簽

内題　二ッ腹帯　八百屋の段
段数　一段。
行数　七行。
丁数　十七丁。
丁付　のど　一……十七
挿絵　なし。
奥付　右謳曲以通俗為要故文字
有正有俗且加文采節奏為
正本云爾
豊竹越前少掾（壷印）
高弟豊竹筑前少掾（角印）
大坂長堀心斎橋北詰　正本屋小兵衛版（角印）
江戸大伝馬町三丁目　鱗形屋孫兵衛版

（追記）角田一郎氏より故石割松太郎氏旧蔵の『近世邦楽年表』にこの興行に関する書入れがあることをご教示いただいた。筆者も石割氏の書入れを写していたので、確認した結果、『義太夫年表・近世篇』では「典拠未詳」とあるが、書入れには「十一月十五日豊竹座（別番付）」とあり、その外題名は

「嬢景清八島日記」
大切「二つ腹帯」八百屋段

とあって、「追善」も「心中」も見られない。人形名についても「八百屋仁兵衛」「手代和介」となっている。本番付以外の別番付に右のようにあったものか、石割氏の省略または誤記か不明である。何れにしても、ここに紹介した原本の記載とは異なることを追記し、角田一郎氏のご注意に深謝する。